



家族参加型ムーブメント活動が障害のある子どもの
きょうだいにもたらす効果
— 親ときょうだいへのアンケート調査から —

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-04-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 美穂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008513

家族参加型ムーブメント活動が障害のある子どものきょうだいにもたらす効果 — 親ときょうだいへのアンケート調査から —

阿部 美穂子

北海道教育大学釧路校特別支援教育研究室

Effects of Family Participating Movement Activity on Siblings of Children with Disabilities — Through the Questionnaire Survey to Parents and Siblings —

ABE Mihoko

Department of Special Education, Kushiro Campus, Hokkaido University of Education

本研究では、地域における障害のある子どもと家族のためのムーブメント活動（身体運動活動）に、障害のある子ども（以下、同胞）の兄弟姉妹（以下、きょうだい）もともに参加した家族を対象にアンケート調査を行い、家族参加型のムーブメント活動がきょうだいの育ちにもたらす効果と参加に伴う課題について検討することを目的とした。2か年にわたる延べ130組による回答を分析した結果、家族参加型ムーブメント活動は、きょうだいが同胞と同様に活動の中心的存在として思う存分楽しむ体験ができ、その成長発達を促すとともに、同胞や親と一緒に遊ぶ体験や、他の同じ立場にあるきょうだいとの交流体験など、きょうだいが日常生活場面ではなかなかできないかわり体験をもたらすことが示された。一方、課題として、参加に関するきょうだいと親の意識の齟齬や、親のきょうだいに対する年齢不相応な期待がある事例も示された。このことから、家族参加型ムーブメント活動がきょうだいの育ちに貢献できるためには、親も含め、参加家族成員それぞれの参加に対する目的意識を持つための支援を行う必要があり、併せて、多様な対象者に対応できるプログラムリーダーの育成と継続的な活動の場の設定が不可欠であると考えられた。

I. 問題の所在と目的

ムーブメント活動は、子どもが目的を持って取り組む身体運動によって、その全人的、調和的な発達を促すための活動であり（小林, 2006）、先行研究では、特に、家族参加型のムーブメント活動が障害のある子どもの発達に及ぼす効果について報告されている（飯村, 1998, 藤井・小林, 2006, 大崎・新井, 2008）。併せて、家族参加型のムーブメント活動では、参加した親の子ども観や子育て観が変容することも指摘されている。藤井・小林（2006）の例では、0歳から2歳まで親子でムーブメント教室に参加しているダウン症児の事例について、家族が対象児の長所に注目する発達観や、日常生活や子育てに対する充足感を持つようになったことが指摘されている。また、大崎・新井（2008）の例では、ムーブメント教室に参加することで、家族が障害のある子どもに対する支援方法を具体的に経験することができ、併せてアセスメントの活用により、対象児へのかかわり方を工夫するようになるとともに、子育ての意欲と喜びを得ることにつながったと報告されている。阿部（2009）によれば、幼児から高校生までの障害のある子どもとその親に対し、定期的に複数回のムーブメント活動を提供し、参加した親の感情や子どもに対する認識に及ぼす

効果について調査した結果、アンケートに回答した親の9割以上が活動中の子どもの活動の様子や活動によってもたらされた自分の気持ちの変化を肯定的に評価していた。このことから、阿部は、家族参加型のムーブメント活動が、子ども本人の成長のみならず、親自身のエンパワメントにつながる可能性を示唆している。

ところでこのような家族参加型の療育活動には親と障害のある子どものみならず、きょうだいが参加することも多い。障害のある子どもの家族という視点で考えるならば、きょうだいもまた、重要な家族の一員であり、活動に参加することで、同胞や親と同じようにその活動から何らかの影響を受けているはずである。しかしながら、このような療育活動にきょうだいが参加することによる、きょうだい自身に対する影響や意義については、これまで関心が寄せられてこなかった。

きょうだいについては、障害のある同胞と暮らすことによって影響を受け、特有の悩みを抱く場合があることが指摘されている。例えば、親が同胞の世話のためにかける時間が多くなり、親や周囲の大人の注目が障害のある子どもに向けられるために疎外感が生まれ、きょうだいとして感じている様々な気持ちを分かち合う仲間と知り合う機

会がない状況で、孤独感を抱いたりするという指摘がある(Meyer & Vadasy, 2008)。また、きょうだいが同胞のために時間を取られ、きょうだい自身の家庭外での経験時間が少なくなり、それが社会性の発達や情緒面での発達に影響するという指摘もある(諏方・渡部, 2005)。

従来の親子参加型の療育活動の多くは保健センターなどを中心に実施されてきており、その目的の中心は、障害のある子どもの発達支援と親の障害受容や子育てスキルアップ(浜本・永田, 2011)であることから、きょうだいはそれに同行してもあくまで付き添いであり、活動に参加することは想定されていない。しかしながら、地域で行われる家族自由参加型のムーブメント活動では、障害のある子どもの家族が楽しみながら参加することを中心理念としているので、きょうだいも同胞と同じ活動に参加し、自分の家族と、あるいは他の障害のある子どもを育てる家族とかわりながらプログラムを体験することとなる。よって、このような活動においては、きょうだいも参加家族の一員であることを踏まえ、きょうだいが参加することのきょうだい本人、及び家族にとっての意義や影響についても検討する必要があると考える。

そこで、本研究では、地域で行われた障害のある子どもと家族のためのムーブメント活動について、参加したきょうだい本人と親のアンケート調査に基づき、その活動がきょうだいの育ちにもたらした効果ときょうだいの参加にかかる課題について明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

20xx年度、及び20xx+1年度に、A県内の障害のある子どもとその家族を対象に月1～2回のペースで5月～12月までに実施されたムーブメント活動にきょうだいとともに参加し、活動評価アンケート調査に回答することを同意した家族のうち、きょうだいに関する質問項目に回答したものを対象とした。アンケートは各年度10回ずつ実施され、対象となった回答者は、初年度が延べ58組で、年間アンケート回答者延べ239組の24.3%、次年度が延べ72組で年間アンケート回答者延べ254組の28.3%にあたる。1家族あたりの参加頻度は年間1～5回であり、各回の対象回答者は1組～14組であった。

2. 評価対象活動プログラム

本研究のアンケートによる評価対象となった活動プログラムは、A県内で実施された任意の家族参加型療育プロジェクトである、「親子で楽しむムーブメント教室」において、提供されたものである。このプロジェクトは、特別支援教育に携わる教員、保育士、福祉指導員、保健師らの有志によって企画・運営され、筆者はそのスタッフの一員であり、スーパーバイザーでもあった。毎年度5月に、年間開催計画を記載したチラシが特別支援学校や小学校、療育施設などで配布され、参加を希望する家族が自由に申し

込むものであり、参加登録をした場合も毎回の出欠に関する強制はなかった。参加者は、同胞のMEPA-R(小林, 2005)によるアセスメントの結果を踏まえて、原則として家族単位で、スタッフによりグループに振り分けられて活動するが、当該家族の希望によりグループを自由に変更でき、さらにきょうだいは、希望すれば同胞とは異なるグループに参加することも可能であった。

本研究で評価対象としたのは、各年度10回分の集団活動プログラムで、そのうち7回分が、同胞の年齢と障害の状態を考慮してグループ別に作成され、3回分が参加者全体用に作成されたものである。プログラムの主な内容を表1に示す。プログラムは、原則として2～3名のスタッフチームあるいは招へい講師によって輪番制で作成され、毎回内容が異なっていた。作成担当者の大多数は、ムーブメント教育・療法士の有資格者であり、そうでない場合も複数年にわたるムーブメント教育・療法の実践経験とスーパービジョンの受講経験を持つ者であった。

1回分の活動は、30分間のフリー活動、60分間のムーブメント活動、30分間の振り返り時間の計120分で構成された。また、活動展開時には、実践研修を目的とする教員、保育士、福祉指導員ら10～40名程度が加わり、プログラム作成担当者のリードで、参加家族をサポートした。

3. アンケート調査内容

アンケート調査は、親が回答するものと、きょうだい自身が回答するものの2種類を実施した。親用アンケートは、きょうだい参加の有無に関わらず、全参加家族を対象に実施され、活動中の同胞、及びきょうだいが参加している場合はその様子と、親自身に関する気づき、活動の感想を問う内容で構成された。そのうち、きょうだいに関する質問は、設問①：参加したきょうだいの年齢と出生位置、設問②：きょうだいの様子で気づいたことや発見したこと(自由記述)、設問③：当日の活動がきょうだいにとって良い影響を与えたと思う点(以下の6つより選択、「きょうだい自身のこころの面で」「同胞の障害の理解の面で」「障害のある同胞とのかかわりの面で」「親とのかかわりの面で」「他の同じきょうだいとのかかわりの面で」「その他(自由記述)」)、複数回答可)と、回答にあたり各項目を選択した理由(自由記述)、設問④：きょうだいにとって良かったと思う活動内容(自由記述)の4種類であった。

一方、きょうだい用アンケートは、参加したきょうだいのうち、独力で回答できる参加者のみを対象に実施された。質問は、設問①：当日の活動の感想を「楽しかった」「どちらかという楽しかった」「どちらでもない」「どちらかという楽しくなかった」「楽しくなかった」の5件法で回答、設問②：楽しかった場合、その内容を以下より選択(「思い切り遊べたこと」「同胞と一緒に遊べたこと」「お父さんやお母さんと一緒に遊べたこと」「他の友達と遊べたこと」、複数選択可)、設問③：参加して、嬉しかったことや来て良かったと思うこと(自由記述)、設問④：活動

表1 ムーブメントプログラムの内容例（20xx年度、及び20xx+1年度分）

区分	内容
全体プログラムの例	<ul style="list-style-type: none"> ・MEPA-Rによるアセスメント（年度当初のみ） ・パラシュートを用いた粗大運動及び社会性プログラム（ドームづくり、くぐりっこ、メリーゴーランドなど） ・各遊具を組み合わせた創造的プログラム（新幹線づくり、サーキットコースづくり、お店屋さんでのお買い物遊びなど） ・タオルを用いた身体運動プログラム（手で回す、ストレッチ、マッサージ、タオルブランコなど）
グループ別プログラムの例	<p><肢体不自由児・幼児中心グループ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャスターボードやユランコを使った揺れ刺激プログラム（キャスターボードに乗ってコースを回る、ユランコで歌にあわせて揺らしてもらう、など） ・スカーフを使った身体意識プログラム（歌に合わせて体をマッサージする、身体部位を隠す、引っ張るなど） ・ロープにつかまって円形になって行う社会性プログラム（順番に名前を言ったり、呼名に应答したりする、協力してロープを動かす、など） ・ウレタン積み木やマットでできたサーキットコースでの粗大運動プログラム（這う、くぐる、またぎこす、よじ登る、転がる、など） <p><小学低学年生中心グループ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ビーンズバッグを用いた「色」「形」の理解促進プログラム（色・形のマッチング、名称との対応など） ・ロープ、フープ、ビーンズバッグを用いたバランス、身体図式プログラム（ロープやフープを渡る、またぎこす、くぐるなどの活動、指定された身体部位にビーンズバッグを乗せるなど） ・手裏剣型カード、紙管、ボール、ビーンズバッグなどを用いた巧緻性プログラム（紙管を倒さずに立て、上に物を置く、ビーンズバッグを的に向かって投げる、など） <p><小学中～高学年生中心グループ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで協力して問題解決する社会性プログラム（一緒に物を運ぶ、同時に複数で遊具を使う方法を考える、役割分担をする、など） ・テーマに沿って表現する創造的プログラム（季節を表す言葉から連想する内容の短い出し物を考えたり、遊具を選んで造形物を作成したりして発表する、など） ・単語の構成や、言葉の意味に応じた身体表現などの言語プログラム（指定された文字から始まる言葉や季節を表す言葉を文字カードで構成する、雨・風、暑さ・寒さなどのイメージを動きで表現する、など） ・相互に評価しあう社会性プログラム（自分や他の参加者の発表について、感想を述べたり、良いところを見つけたりする、など）

に参加して嫌だったことの有無（ある、ないの2択）、あった場合その内容（自由記述）、設問⑤：今後の活動への参加の意志（「来たい」「どちらでも良い」「来たくない」の3択）の5つで構成された。

アンケートは記名式で、回答の可否は参加者の判断に任せられ、回答拒否者への不利益がないことが保障されていた。また、アンケート用紙は毎回のプログラム終了後の振り返り時間の際に配布され、その場で回収された。記入所要時間は、親用の場合アンケート全体で10～15分程度で、きょうだい用の場合、3～5分程度であった。

4. アンケート結果の分析方法

設問別に内容を分析した。自由記述回答については、共通する意味内容をまとめてカテゴリー化し、各カテゴリーに短い文で見出しをつけた。1つの回答に複数の意味内容が含まれる場合は、意味内容ごとに分類した。カテゴリー化は筆者と特別支援学校教諭（経験33年）の2名で行い、両者の意見が一致した段階で最終とした。また、後述するように、親用アンケートでは回答対象となったきょうだいの年齢幅が0歳～14歳と広く、年齢によって回答内容に差がある可能性が考えられたため、設問の特質に応じて、適宜6歳未満の乳幼児期と6歳以上の学齢期の2群に分けて集

計と分析を行った。一方、きょうだい用アンケートでは、乳幼児期にあるきょうだいの中で回答できる者がごくわずかであり、大多数の回答者の年齢が学齢期にあったので、年齢群別の分析は行わなかった。なお、各回のアンケート回答者数のばらつきが大きいため、データは年度ごとに延べ回答数で集計した。そのため、同一きょうだいについて複数回のデータが含まれるが、実施した活動プログラム内容が各回で異なっていることから、別々のデータとして処理した。

Ⅲ. 親のアンケート結果と考察

1. 設問①：回答対象のきょうだいの年齢と出生位置について

アンケート回答者数、出生位置内訳、平均年齢等を表2に、年齢別人数を表3に示す。

表2より、アンケート回答対象となったきょうだいは各年度とも弟あるいは妹の出生位置にある者が多く、合わせると約7割以上を占めた。特に年下きょうだいは、親が同胞のために外出する際は同伴せざるを得ないケースが多いと考えられ、そのようなきょうだいたちも一緒に参加できる活動の場が必要であることが改めて示された。

兄、姉は学齢期（6歳以上）にある者が多く、妹は乳幼児期（6歳未満）にある者が多くを占めたが、弟は両時期ともほぼ同じ程度の対象者数が含まれ、各年度とも乳幼児期、学齢期の対象者数に大きな差は見られなかった。また、表3より、きょうだいの年齢は大部分が0～10歳の範囲にあり、平均年齢は20xx年度が5.3歳、20xx+1年度は5.0歳であった。

このことから、家族参加型のムーブメント活動に参加するきょうだいの年齢幅は乳児から小学校中・高学年までの広範囲に及んでいることが示され、多様な年齢実態のきょうだいに参加できる内容が必要であると考えられた。

2. 設問②：きょうだいの様子で気づいたことや発見したことについて

本設問の回答者は20xx年度が27組、20xx+1年度は45組で、きょうだいに関するアンケート回答者のそれぞれ46.6%、62.5%であった。前者で29個、後者で49個の意味内容が得られ、それぞれ表4に示す9個のカテゴリーに分類された。そのうち、【いろいろな障害のある子どもと一緒に遊べた】【その他】（以下、【 】はカテゴリーを示す）の2つを除く、7個のカテゴリーが共通であったので、2か年度分の78個の意味内容を合わせ、年齢群別に検討した。年齢群に占めるカテゴリーの割合を図1に示す。

各カテゴリーの具体例としては、【楽しそうだった】では「よく笑っていた（兄6歳）」「のびのび楽しんでいた（姉9歳）」「言葉づくりの活動が楽しいようだった（妹5歳）」、【これまでできなかったことができるようになって成長を感じた】では、「友達の行動をよく見て参加する姿に成長を感じた（姉9歳）」「先生の指示をきちんと聞いて理解して行動できた（弟8歳）」「一つ一つの課題をがんばり、自信を持っ

たように見えた（妹5歳）」、【同胞の面倒をよく見たり、同胞と仲良くする姿が見られた】では、「同胞をよく見ていた（兄6歳）」「同胞を気遣いながら自分も楽しんでいた（姉8歳）」「同胞がゆっくりなので、自分の分を分けてあげたりしていた（弟5歳）」「同胞をリードしてくれた（妹6歳）」、【普段見られない積極的な姿が見られた】では、「知らない場所や人前では話をしないのに、今日は自己紹介も上手にできてびっくりした（兄5歳）」「『ほら、ぼくできるよ』といろいろチャレンジしていた（弟4歳）」「自分で一生懸命考えて他の人の出し物への感想を述べていた（弟8歳）」「積極性が出てきた（妹4歳）」「年齢は小さいけれど、嫌

表2 回答対象となったきょうだいの実態

出生位置	年度	6歳未満人数	6歳以上人数	計	%	平均年齢
兄	20xx	7	0	7	12.1	7.4
	20xx+1	5	1	6	8.3	9.0
姉	20xx	8	0	8	13.8	7.3
	20xx+1	10	0	10	13.9	9.0
弟	20xx	7	9	16	27.6	5.5
	20xx+1	12	11	23	31.9	4.5
妹	20xx	6	21	27	46.6	4.0
	20xx+1	6	27	33	45.8	3.4
合計	20xx	28	30	58	100	5.3
	20xx+1	33	39	72	100	5.0

表3 回答対象となったきょうだいの年齢別人数（人）

	年齢	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
20xx年度	n	1	3	5	7	5	9	5	10	11	1	1				
20xx+1年度	n	6	8	11	5	4	5	9		6	13	3	1			1

表4 「きょうだいの様子で気づいたことや発見したこと」の回答の意味内容カテゴリー（数値は意味内容数）

カテゴリー	年齢群	20xx年度	20xx+1年度	意味内容数計(%)	兄	姉	弟	妹
楽しそうだった	6歳未満	3	0	3 8.1%			1	2
	6歳以上	4	7	11 26.8%	3	2	6	
これまでできなかったことができるようになって成長を感じた	6歳未満	4	5	9 24.3%			1	8
	6歳以上	1	3	4 9.8%		1	2	1
同胞の面倒をよく見たり、同胞と仲良くする姿が見られた	6歳未満	3	2	5 13.5%			2	3
	6歳以上	2	4	6 14.6%	1	2	2	1
普段見られない積極的な姿が見られた	6歳未満	1	8	9 24.3%	1		2	6
	6歳以上	3	3	6 14.6%			6	
きょうだいが同胞の影響なしに十分満足して活動できていた	6歳未満	0	0	0 0.0%				
	6歳以上	1	2	3 7.3%	1	1		1
いろいろな障害のある子どもと一緒に遊べた	6歳未満	0	0	0 0.0%				
	6歳以上	0	5	5 12.2%	1		3	1
きょうだいのできないことや親の期待と異なる姿が見られた	6歳未満	2	6	8 21.6%			3	5
	6歳以上	0	3	3 7.3%	1		2	
親を求めてかかわりたがる姿が見られた	6歳未満	3	0	3 8.1%			1	2
	6歳以上	0	1	1 2.4%			1	
その他	6歳未満	0	0	0 0.0%				
	6歳以上	2	0	2 4.9%	1	1		
合計	6歳未満	16	21	37 100%	1	0	10	26
	6歳以上	13	28	41 100%	8	7	22	4

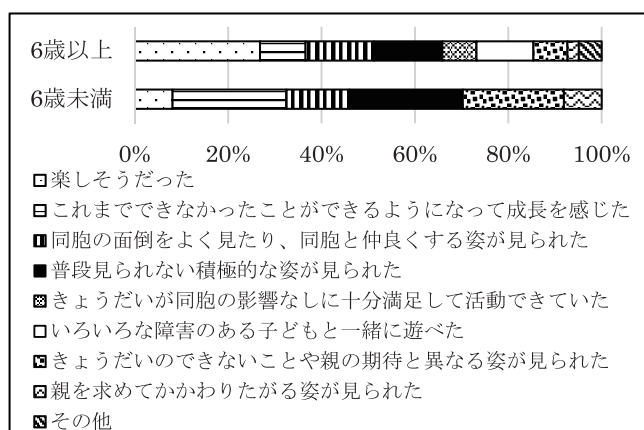


図1 年齢群に占める意味内容カテゴリーの割合 (%)

がらずに参加できた (妹2歳)」、【きょうだいが同胞の影響なしに十分満足して活動できていた】では、「兄は兄、同胞は同胞というように、しっかり守られていた (兄14歳)」「スタッフに1対1でかかわってもらい、一つ一つの活動に満足できた (姉9歳)」、【いろいろな障害のある子どもと一緒に遊べた】では、「いろいろな子どもがいる中で遊ぶことができた (姉9歳)」「他の障害のある子どもとも進んで手をつないで活動していた (弟10歳)」、【きょうだいのできないことや親の期待と異なる姿が見られた】では、「年下の子どもと遊べない (兄10歳)」「恥ずかしがってやろうとしない (弟6歳)」「同胞につられて (真似て) しまう (弟1歳)」「疲れてくると我慢できない (妹3歳)」「順番が理解できない (妹2歳)」、【親を求めてかかわりたがる姿が見られた】では、「家族と手をつなぎたがる (弟6歳)」「抱っこをせがむ (弟4歳)」「すねる (妹5歳)」、【その他】では、「同胞の障害に戸惑っている (姉8歳)」「他のきょうだい児が少ないので物足りない (兄8歳)」などであった。

表4と図1から年齢群で比較すると、大部分のカテゴリーは、双方の年齢群で共通しており、【楽しそうだった】【これまでできなかったことができるようになって成長を感じた】【普段見られない積極的な姿が見られた】のように、きょうだい自身に関する肯定的な気づきとともに、【同胞の面倒をよく見たり、同胞と仲良くする姿が見られた】のように、同胞との積極的なかかわりに関する気づきが見られた。一方、【きょうだいのできないことや親の期待と異なる姿が見られた】のように否定的な気づきもあった。

6歳未満群では、【これまでできなかったことができるようになって成長を感じた】【普段見られない積極的な姿が見られた】のカテゴリーに含まれる意味内容数がいずれも全体の20%以上で他のカテゴリーよりも多くなっており、きょうだい自身の成長や能力の高まりに関する親の発見が語られた。具体例に見るように、家庭では見られないきょうだいの積極的な姿や自信に満ちた姿が確認されている。しかしその一方で、【きょうだいのできないことや親の期待と異なる姿が見られた】のカテゴリーも21.6%と同様に

多く、具体例の中には、先に挙げたように「疲れてくると我慢できない (妹3歳)」「順番が理解できない (妹2歳)」など年齢的に当然と考えられることが「できない」として挙げられており、Meyer & Vadasy (2008) が指摘するように、年齢不相応の成長を期待される年少きょうだいの状況が示唆された。

6歳以上群では、【楽しそうだった】のカテゴリーの意味内容数が占める割合が26.8%と最も多くを占め、続いて【普段見られない積極的な姿が見られた】が14.6%であり、具体例でも「よく笑って」「のびのびと」などの表現に見られるように、きょうだいの伸びやかで楽しげな姿が確認されていた。また少数ではあるが、【きょうだいが同胞の影響なしに十分満足して活動できていた】のカテゴリーが6歳以上群にのみ見られたことも併せ、学齢期のきょうだいにとっても、十分楽しみ、満足できる活動であったことが示唆された。一方、【いろいろな障害のある子どもと一緒に遊べた】も、6歳以上群にのみ見られたカテゴリーであり、【同胞の面倒をよく見たり、同胞と仲良くする姿が見られた】と同様に、10%台を占めた。このことから、学齢期になると、同胞だけでなく、他の家族の障害のある子どものかかわりが生み出されることが家族参加型のムーブメント活動の重要な要素の一つとなっていると推測された。

また、9カテゴリーのうち【親を求めてかかわりたがる姿が見られた】については、年齢群を問わず弟と妹のみで回答があり、活動の場が年少位置にあるきょうだいの思いに親が気づく機会となったことが示された。

3. 設問③：当日の活動がきょうだいにとって良い影響を与えたと思う点について

本設問の回答者は20xx年度が40組、20xx+1年度は43組で、きょうだいに関するアンケート回答者のそれぞれ69.0%、59.7%であった。年度別各年齢群の選択状況を表5に示す。

各年度とも、年齢群別に各選択肢が占める割合の傾向は類似しており、6歳未満群では、〔きょうだい自身のこころの面で〕(以下、〔 〕は、選択肢を示す)が70%以上で最も割合が高く、続いて〔障害のある同胞とのかかわりの面で〕、〔親とのかかわりの面で〕が30%台であった。一方、6歳以上群では、〔きょうだい自身のこころの面で〕が、20xx年度で45.0%、20xx+1年度で54.5%、〔障害のある同胞とのかかわりの面で〕が同じく75.0%、50.0%と、いずれも高率であった。併せて〔他の同じきょうだいとのかかわりの面で〕についても、各年度とも30%以上を占めており、学齢期きょうだいを受ける影響は、乳幼児期きょうだいに比べ、より多様であることが示された。

それぞれの回答を選択した理由の例としては、〔きょうだい自身のこころの面で〕では、「知らない人とも仲よく一緒に遊んで楽しんでいたら (姉7歳)」「いつも同胞中心の生活をしているので、今回は本人も参加できて良かった

表5 「当日の活動がきょうだいにとって良い影響を与えたと思う点」の選択状況（数値は人数）

選択肢	年齢群	20xx年度				20xx+1年度								
		選択数	回答者に占める割合	兄	姉	弟	妹	選択数	回答者に占める割合	兄	姉	弟	妹	
きょうだい自身のこの面での	6歳未満	14	70.0%			2	12	15	71.4%	1		4	10	
	6歳以上	9	45.0%	3	3	3		12	54.5%	1	2	8	1	
障害のある同胞とのかわりの面での	6歳未満	7	35.0%				1	6	7	33.3%			1	6
	6歳以上	15	75.0%	5	1	4	5	11	50.0%	1	2	5	3	
親とのかわりの面での	6歳未満	7	35.0%				1	6	8	38.1%			1	7
	6歳以上	4	20.0%	2	2			1	4.5%				1	
他の同じきょうだいとのかわりの面での	6歳未満	3	15.0%				1	2	3	14.3%				3
	6歳以上	6	30.0%	3	2	1		7	31.8%	1	1	4	1	
同胞の障害の理解の面で	6歳未満	0	0.0%						3	14.3%				3
	6歳以上	5	25.0%	1	1	3		4	18.2%		2	2		
選択数合計	6歳未満	31		0	0	5	26	36		1	0	6	29	
	6歳以上	39		14	9	11	5	35		3	7	19	6	
回答者数合計	6歳未満	20	100%				4	16	21	100%	1		4	16
	6歳以上	20	100%	5	5	5	5	22	100%	3	4	10	5	

た（弟6歳）「いろいろな子どもとかかわることで、自分を少しずつ表現しようとしていた（妹5歳）」「どの活動もやってみたくて積極的だった（妹2歳）」のように、きょうだい自身がのびのびと活動に取り組むことができた様子が挙げられた。また、「障害のある子どもたちと偏見なくかわる様子が見られた（弟7歳）」「障害のあるなし関係なく楽しんでいたのが良かった（妹3歳）」のように障害のある子どもとのかわりの広がりや「障害の有無にかかわらず、人としていろいろな方と関わる力を身につける機会になると感じた（姉9歳）」「他の人と協力する大切さを学んでいる（妹6歳）」「皆が集まって一つの目的に向かい行動することは子どもの全体的な成長に大切だ（妹5歳）」「年上の人とのかわりの大切さを感じた（妹4歳）」のように、きょうだい、社会性及び対人能力の成長に有益な体験を得ていることを指摘する回答が見られた。

〔障害のある同胞とのかわりの面で〕では、「『できた!』と、同胞と一緒に喜ぶ姿が見られた（兄10歳）」「同胞の障害を自然と受け入れているようだ。他の参加者にもうまく同胞のことを伝えてくれている（姉9歳）」「同胞と仲良く遊ぶことができた（弟7歳）」「同胞とも他の人と同じように区別なく楽しむことができた（妹9歳）」「日頃同胞と一緒に遊ぶことが少ないので良かった（妹2歳）」など、活動を通して同胞ときょうだいのより親しいかわりが得られたことが挙げられた。

〔親とのかわりの面で〕については、「普段、きょうだいにゆっくりかわる時間が少ないので、一緒に遊べて嬉しかった（妹8歳）」「親と一緒に活動できて嬉しそうだった（妹2歳）」など、普段できない親と一緒に活動を体験できたことが挙げられた。

また、〔他の同じきょうだいとのかわりの面で〕では、

「たくさん子どもたちと同じ活動ができた（兄10歳）」「異なる年代の子どもと一緒に遊ぶと刺激になる（兄8歳）」「誰とでも仲良く活動できた（弟9歳）」「新しい友達と協力して活動できた（弟8歳）」「他の人の行動を見て良い点を取り入れていた（妹5歳）」と、きょうだい同士が出会ってすぐに仲良くなり、ともに活動に取り組み、刺激しあったり、協力しあったりする様子が報告された。

〔同胞の障害の理解の面で〕については、「同胞ときょうだいがお互いにどう思っているのか考えられるようになってきたと感じた（兄10歳）」「いろんな障害のある人との接点もてる（姉9歳）」などの指摘があった。

4. 設問④：きょうだいにとって良かったと思う活動内容について

本設問の回答者は20xx年度が29組、20xx+1年度は34組で、きょうだいに関するアンケート回答者のそれぞれ50.0%、47.2%であった。得られた意味内容のカテゴリーを表6に示す。

意味内容は各年度とも個数の多いものから順に、【具体的活動内容】【ムーブメント活動を通して得られた体験】

【家族参加型ムーブメント活動が生み出した場面状況】の3つのカテゴリーに整理された。

各カテゴリーの具体例としては、【具体的活動内容】ではパラシュートを用いた活動が最も多く12個（6歳未満群：8、6歳以上群：4）で、特に新聞紙やカラーボールと組み合わせさせて動きを生み出した活動が挙げられた。次いで、テーマに沿ってグループで出し物を考えたり、造形物を作ったりする創造的プログラムが9個（6歳以上群のみ）、ボール、ビーンズバッグなどを用いた巧緻性プログラムが6個（6歳未満群：3、6歳以上群：3）、音楽や遊具環境に合わせていろいろな動きをアレンジするプログラムが5個（6歳未満

表6 「きょうだいにとって良かったと思う活動内容」の回答の意味内容カテゴリー（数値は意味内容数）

カテゴリー	年齢群	20xx年度	20xx+1年度	意味内容数計(%)	兄	姉	弟	妹	
具体的活動内容	6歳未満	8	12	20	50.0%	2	1	5	12
	6歳以上	10	10	20	58.8%	3	3	10	4
ムーブメント活動を通して得られた体験	6歳未満	6	6	12	30.0%	0	0	1	11
	6歳以上	6	4	10	29.4%	2	1	3	4
家族参加型ムーブメント活動が生み出した場面状況	6歳未満	3	5	8	20.0%	0	1	2	5
	6歳以上	2	2	4	11.8%	1	0	0	3
合計	6歳未満	17	23	40	100%	2	2	8	28
	6歳以上	18	16	34	100%	6	4	13	11

群：4、6歳以上群：1）などであった。他に少数であるが、自己紹介や他者を褒めるなどの社会性プログラム、キャスターボードなどによる揺れ刺激プログラム、文字による単語構成を行う言語プログラムなどが挙げられた。このことから、パラシュートのように参加者全員が力を合わせて行う活動や、グループで協力して表現する活動が、親から見て、きょうだいにとって良かった活動として受け止められていることが示された。

同様に【ムーブメント活動を通して得られた体験】においても「障害のある子どもと障害の有無を意識せず仲良く遊べる環境を体験できたこと（兄10歳）」「障害のある子どもも、ない子どもも関係なく遊べたこと（姉8歳）」「大人も子どもも、ともに同じ課題をやり遂げた達成感を味わえたこと（妹5歳）」「複数の子どもで一緒にものを作ったこと（妹6歳）」「他の子どもと一緒に表現活動ができたこと（妹8歳）」というように、障害の有無や年齢の差異に関係なく、ともに同じ活動で力を合わせたり、十分遊べたりしたことがきょうだいにとって良かったという回答が見られた。ほかに本カテゴリーでは、「クリスマスツリーづくりなど、自分で考えて作り上げる体験ができたこと（弟5歳）」「サーキットのてこぼ道づくりなど、自分で考えて作る楽しさを味わえたこと（弟7歳）」などの創造的な活動体験や、「普段遊べない大きなトランポリンで思いっきり遊べたこと（弟7歳）」「いつもと違う体の動きを体験したこと（妹9歳）」のようにムーブメント活動ならではのダイナミックな動きの体験、「ご褒美シールをもらえたこと（妹3歳）」「メダルをもらったこと（妹5歳）」のように褒められる体験などが挙げられた。

【家族参加型ムーブメント活動が生み出した場面状況】では、「いろいろな考え方をする人がいることを知ることができる場（兄8歳）」「障害の有無にかかわらず、人として、いろいろな相手とかわる力を身に着けることができる場（姉9歳）」「障害のある子どもについて理解し、かわることができる場（妹0歳）（妹8歳）」「大人数の中にいることができる場（妹2歳）」のように、いずれも集団での活動を通して、障害の有無にかかわらず、きょうだいの対人能力を高めていくことができる場としての意義が挙げられた。

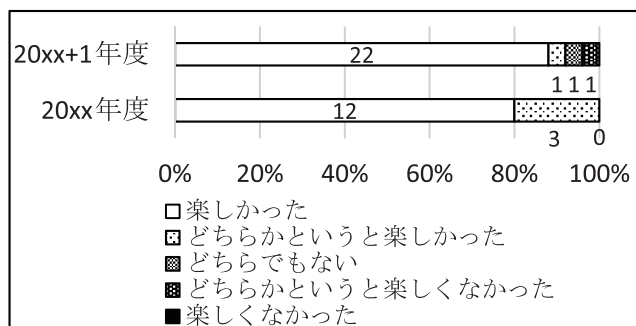


図2 きょうだいのムーブメント活動の感想（図中の数字は人数）

IV. きょうだいのアンケート結果と考察

1. 回答者内訳

アンケートに回答したきょうだいは20xx年度が延べ15人、20xx+1年度が延べ27人で、年齢範囲は前者が5歳～8歳、後者が5歳～14歳で、幼児期にあるきょうだいは5歳児が各年度に1名ずつ、その他はすべて学齢期のきょうだいであり、平均年齢はそれぞれ7.0歳と8.5歳であった。出生順位内訳は20xx年度は、兄が2人、姉が5人、弟が3人、妹が4人、無回答1人、20xx+1年度は、兄が2人、姉が10人、弟が10人、妹が4人、無回答1人であった。幼児期の回答者が2名と少ないことから、各設問における年齢群別の分析は行わず、全体で集計し、考察した。

2. 設問①：当日の活動の感想について

年度別の各選択肢の選択割合を図2に示す。回答したきょうだいは20xx年度が延べ15人、20xx+1年度が延べ25人で、両年度とも「楽しかった」の評価が80%以上であり、きょうだいにとっても、ムーブメント活動は楽しめるものであったことが示された。

3. 設問②：楽しかった内容について

年度別の各選択肢の回答者全員に占める選択率を図3に示す。各年度とも、「思いっきり遊べたこと」の選択率が最も高く、大多数のきょうだいがムーブメント活動を自分自身のための活動として体験し、満足していることがうかがわれた。次いで、「同胞と遊べたこと」の選択率が多く、ムーブメント活動が障害のある同胞と同じ遊びを楽しむことができる機会となっていることが示された。これについては、上述した親のアンケート記述で、日頃一緒に遊ぶこ

表7 きょうだいに参加して、嬉しかったことや来て良かったと思うことの意味内容カテゴリー(数値は意味内容数)

カテゴリー	20xx年度	20xx+1年度	意味内容数計(%)	兄	姉	弟	妹	無記入	
楽しさを味わった具体的活動内容	8	7	15	37.5%	2	6	4	3	0
活動内容に関する満足感	3	9	12	30.0%	0	6	4	1	1
活動における達成感	0	6	6	15.0%	0	1	2	3	0
家族や参加者との交流	4	3	7	17.5%	1	2	2	1	1
合計	15	25	40	100%	3	15	12	8	2

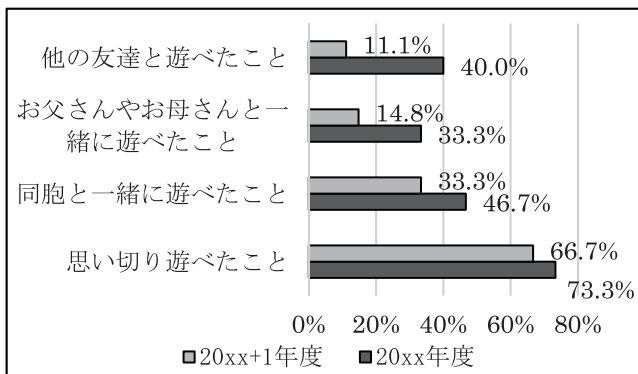


図3 きょうだいを選んだ楽しかった理由

とが難しい同胞と同じ遊びに取り組めたことが良い体験であったとする報告と重なる部分である。

4. 設問③：参加して、嬉しかったことや来て良かったと思うことについて

20xx年度は延べ14人、20xx+1年度は延べ24人から、それぞれ15個、25個の意味内容の回答が得られた。表7に示すように、前者は3個、後者は4個のカテゴリーに分類された。2か年分を合わせた各カテゴリーの回答数が全回答数に占める割合は、高いものから順に、【楽しさを味わった具体的活動内容】が37.5%、【活動に関する満足感】が30.0%、【家族や参加者との交流】が17.5%、【活動における達成感】が15.0%となった。

具体的内容例としては、【楽しさを味わった具体的活動内容】では、「パラシュートが良かった(兄5歳、弟10歳、妹6歳)」のように日頃体験することができない遊具を集団で使う活動や『『お使いに行こう』(親から頼まれたものを買に行く、見立て遊び)の活動が楽しかった(姉8歳、姉7歳)」「サンタさんのプレゼントを買に行くの(サンタに扮したスタッフに頼まれたものを買に行く、見立て遊び)が楽しかった(弟10歳)」「クリスマスツリーづくりが楽しかった(弟10歳、弟6歳)」のように、季節のテーマに応じた創造的な活動、「タオルを使って、ブランコのようにする遊び(姉9歳)」「青い線をたどって歩く遊び(姉8歳)」「ペットボトルを使ったボウリング(姉6歳)」「積み木やマットで作った、でこぼこ道のサーキット(妹8歳)」のように身近な素材を使ってダイナミックな遊び環境を作る活動などが挙げられた。

【活動内容に関する満足感】では、「パラシュートに乗れ

たこと(姉9歳、弟7歳、妹8歳)」「いろいろな遊びができたこと(姉9歳、弟9歳)」「思い切り遊べたこと(弟10歳)」のように、十分身体を使った遊びができた満足感を挙げたものや、「自分の新幹線(ほかの子どもと一緒に、遊具を利用して、オリジナル新幹線車両を作って、一緒に乗る遊び)を考えて、いっぱい作れたこと(姉9歳)」「ツリーをつくることができたのが嬉しかった(弟8歳)」のように自らアイデアを出し、それを実現した満足感を挙げたものがあった。

【活動における達成感】は、「バケツを使った野球ゲームでヒットが打てた(妹9歳)」「パラシュートでつくったバルーンの中に入ることができた(妹9歳)」「側転ができた(弟6歳)」のように取り組んだ活動が成功したことが嬉しかったと感想を述べたものであった。

【家族や参加者との交流】については、「友達と仲良く遊べた(兄7歳、姉10歳、姉6歳)」「(季節のテーマについて表現する活動で)よく考えている人がいっぱいいて、来て良かったと思った(弟8歳)」「お母さんと一緒に遊べた(妹5歳)」のようにそれぞれが、集団活動で得られたかかわり体験を挙げていた。

5. 設問④：活動に参加して嫌だったことの有無と、あった場合の内容

嫌だったことが〔あった〕と回答したのは、20xx年度が延べ3名(20.0%)、20xx+1年度が延べ2名(7.4%)で全体では延べ5名(11.9%)であった。内容は「自己紹介が嫌だった(兄5歳)」「活動中に大蛇に食べられるの(見立て遊び)が嫌だった(妹8歳)」という、活動内容に関するもの、「遊んでいたものを他の子どもにとられた(姉6歳)」「同胞とけんかになった(弟5歳)」という、活動中のトラブルに関するもの、「少し寒かった(兄6歳)」という、活動環境に関するものであった。

6. 設問⑤：今後の活動への参加の意志について

20xx年度は延べ14人、20xx+1年度は延べ24人から回答が得られた。表8に示すように、〔また来たい〕を選択して、積極的な継続参加の意思を示したものが85.4%であり、家族参加型のムーブメント活動は、それを体験した大多数のきょうだいにとって、繰り返し参加したいと感じられる活動の場であったと考えられた。一方、〔もう来たくない〕を選択して、参加を拒否する意思を示したものはなかった。また、先の設問④で、活動に参加して嫌だったことが

表8 きょうだいの今後の活動への参加の意志（数値は人数）

選択肢	20xx年度	20xx+1年度	人数計(%)	兄	姉	弟	妹	無記入
また来たい	11	24	35 85.4%	4	11	12	7	1
どちらでもよい	3	3	6 14.6%	1	4	0	1	0
もう来たくない	0	0	0 0.0%	0	0	0	0	0
合計	14	27	41 100%	5	15	12	8	1

〔あった〕と回答した5名のうち、4名は〔また来たい〕を選択し、1名は〔どちらでもよい〕を選択した。

V. 総合考察

1. 家族参加型ムーブメント活動がきょうだいの育ちにもたらす効果

(1) 家族の中での、きょうだいの中心的存在体験の促進

先行研究では、きょうだいとその成長過程で抱く感情の一つとして「自分は二の次」感が挙げられている（笠井, 2013）。すなわち、親が同胞の世話に手を取られるので、きょうだいは親にかまわれず、後回しにされてしまう体験の積み重ねから得た自己像といえる。また、親が同胞と療育活動に出かける場合など、きょうだいが年少であれば、留守番が難しいので同行せざるを得ないが、行った先にきょうだいが参加できる活動の場はないことが多く、そこでもきょうだいは「疎外感」を抱くこととなる。逆に、家等で留守番していたとしても、家族から取り残された「孤独感」を味わうことには変わりがない。

これに対し、家族参加型ムーブメント活動では、障害のある子どもの療育活動として設定されたものではあるが、きょうだいは付き添いではなく、参加者の一人として位置づけられ、同胞とともに同じ活動に参加する機会が設けられている。本研究における調査では、図2より参加したきょうだい本人の80%以上が〔楽しかった〕と述べ、さらに図3より、その理由として〔思いきり遊べた〕が最も多かったことから、活動がきょうだいにとって、十分満足できるものであったことがうかがわれる。このことは、親アンケートの設問②の回答で、表4に見るように、〔楽しそうだった〕〔きょうだいが同胞の影響なしに十分満足して活動できていた〕というカテゴリーが得られたことから、裏付けられる。このカテゴリーに属する回答は、6歳未満群よりも6歳以上群で多くなっており、「よく笑って」「のびのびと」という具体的回答例にもあったように、学齢期のきょうだいにとって、自分のために十分活動できる場となっていることがうかがわれた。

また、設問③の回答で、表5の「活動がきょうだいにとって良い影響を与えた点」の中での、〔きょうだい自身のこころの面で〕の選択理由として、いつもの同胞中心の生活とは異なり、きょうだいが活動に参加できたことを挙げる記述も見られた。このことから、家族参加型ムーブメント活動が、きょうだいに「自分は二の次」と感じさせることなく、自分もまた家族での活動における中心的存在の1人で

あると感じられる体験の機会となることが示唆された。

(2) きょうだいの活動への積極的参加と達成感や満足感獲得の好循環形成

表7のきょうだい用アンケート設問③の結果に見るように、きょうだいたちはプログラムにおいて楽しかった活動内容を具体的に挙げるだけでなく、それに十分取り組めた満足感や、自分でチャレンジしたり、工夫したりしてやり遂げることができた達成感などを「参加して良かったこと」として報告した。例えば「パラシュートに乗れた」「自分で考えて…作れた」のように、「〇〇ができた」と、取り組んだ自分について肯定的に評価し、そのような自分を嬉しいと感じていることが示された。

また、親用アンケートでも、表4の設問②の回答に見るように、親は、活動に取り組む過程で、きょうだいに【普段見られない積極的な姿が見られた】ことを確認し、【これまでできなかったことができるようになって成長を感じた】と評価している。このような親の回答は、特に6歳未満群で多くなっており、親は、特に乳幼児期にあるきょうだいについて、ムーブメント活動への参加によって得られる成長発達の促進効果をより強く認識していることが、示唆された。

親用アンケートの設問④では、きょうだいにとって良かったと思う活動内容として、多様なプログラム内容が具体的に挙げられており、中でも、ダイナミックに体を動かすプログラムや、パラシュートを協力して使うプログラム、季節のテーマに応じて集団で表現する創造的プログラムなどは、親だけでなく、きょうだい本人へのアンケートの設問③の回答でも、【楽しさを味わった具体的活動内容】として挙げられていた。

以上の記述から、きょうだいたちが多様なムーブメント活動に積極的に取り組み、達成感を感じ、そのような自分に満足して、さらに積極的に取り組む好循環が生まれていると考えられた。ムーブメント活動においては、参加する子どもの実態に応じて、個々の活動内容、方法などを選択、変更できる、活動アプローチの柔軟性（小林, 2006）を活動展開の原則としている。この原則により、子どもは自分自身で課題レベルや取り組み方法を選択しながら、活動に取り組むことができるので、本来、障害のある子どもが取り組むことを前提に作成された活動が、きょうだいにとっても、達成感と積極性を生み出すものとなったと考えられる。このように、ムーブメント活動への参加がきょうだいの成長発達を促す場となりうることが示された。

(3) きょうだいと同胞、親、および他のきょうだいとの関係促進

吉川(2008)によれば、2007年から2008年にかけてナイスハート基金により行われた「障害のある人のきょうだいへの調査」で、きょうだいが小学生時代に感じていた他の家族との違いのうち、否定的評価として多かったものに、「同胞と一緒に遊べない」「同胞とけんかができない」などの同胞との関係があったと報告されている。このように、同胞と当たり前の兄弟姉妹関係を十分体験できないでいるきょうだいの現状が明らかにされた。また、同様に親との関係においても「甘えられなかった」「家族がお互いに接する時間がなかった」と、十分なかかわりを持つことができない状況が挙げられた。また、「家族で外出しても楽しめない」という評価もあり、家族で楽しさを共有できる体験が少ないことも挙げられた。

きょうだいの友人関係については、「I. 問題の所在と目的」の項でも述べたように、Meyer & Vadasy(2008)が、きょうだいが自分と同じ立場のきょうだいに出会う機会がなく、分かり合える相手がいないことによる「孤独感」を抱くと指摘している。このように、きょうだいたちは、同胞、親、そして友人関係において、体験や感情を十分共有できる関係性を持ちにくい状況にあることが推測される。

これに対し、本研究における調査では、ムーブメント活動におけるきょうだいと同胞とのかかわりに関しては、図3に見るように、設問②できょうだいたちが選択した、活動が楽しかった理由のうち、「同胞と一緒に遊べたこと」が、「思い切り遊べたこと」に次いで多くなっており、同胞と同じ遊びを楽しむ体験ができたきょうだいが多かったことが示された。また、親に対する調査でも、設問③の「活動がきょうだいにとって良い影響を与えたと思う点」として、「障害のある同胞とのかかわりの面」での選択率が、特に6歳以上群で高くなっており(20xx年度:75.0%、20xx+1年度:50%)、具体例でも述べたように、同胞と一緒にプログラムリーダーが示した課題をやり遂げたことを喜び会う姿や、同胞とも他の人と同じように区別なく遊べた姿、日頃なかなかかかわれないでいる同胞と一緒に遊べた姿などが報告され、活動を通して同胞とのかかわりが促進されたことが示された。

きょうだいと親との関係については、図3よりきょうだい本人の約15%~33%が、「お父さんやお母さんと一緒に遊べたこと」が楽しかったと報告している。親に対する調査でも、設問②において、表4に見るように年齢を問わず、特に弟や妹の位置にあるきょうだいが親を求めてかかわりがる姿が見られたり、設問③において、表5に見るように、活動が「親とのかかわりの面」できょうだいに良い影響を与えたとする回答が、特に6歳未満群で約35~38%あったりなど、活動に参加したことで、親子のかかわりが促進されたことを示す意見が見られた。回答理由の具体例からも、日頃からかまってやりたいと感じていてもなかなか

かできないでいる親が、きょうだいと一緒に活動できる機会を得たことが報告された。

さらに、他のきょうだいとのかかわりについて、きょうだい自身に対する調査では、図3より設問②で約11%~40%が楽しかったこととして報告し、設問③の嬉しかったことや来て良かったことの自由記述回答でも、複数のきょうだいが「友達と仲良く遊べた」ことを挙げている。親に対する調査では、設問③で、表5より、特に6歳以上群で、「他の同じきょうだいとのかかわりの面」でムーブメント活動がきょうだいに良い影響を与えたとする回答が約30%~32%あり、その理由として、複数のきょうだいたちと仲良く遊べたことやお互いに刺激になったことなどが挙げられており、ムーブメント活動で得られた他のきょうだいとのかかわりが、きょうだいにとって有益なものであると受け止められていることが示唆された。

以上のことから、ムーブメント活動にきょうだいに参加することで、きょうだいにとって同胞と同じ遊びを楽しめる体験、親と遊びを通してかかわる体験、及びきょうだい同士の出会いと交流体験を促進できることが示された。

(4) 同胞及び障害のある子どもの理解促進

親への調査では、設問③において、表5に見るように、「同胞の障害の理解の面」で活動がきょうだいにとって良い影響を与えたとする回答が、約15%~25%見られた。また、設問②の回答カテゴリーでは、表4より、きょうだいが【いろいろな障害のある子どもと一緒に遊べた】ことに気づいたとする回答が、特に6歳以上群で約12%見られた。さらに、設問④の、きょうだいにとって良かったと思う活動内容に関する回答においては、【ムーブメント活動を通して得られた体験】として、「障害のある子どもと障害の有無を意識せず仲良く遊べる環境の体験」「障害のある子どもも、ない子どもも、関係なく遊べた体験」が挙げられ、【家族参加型ムーブメント活動が生み出した場面状況】でも「いろいろな考え方をしている人がいることを知ることができる場」「障害の有無にかかわらず人としていろいろな相手とかかわる力を身につけることができる場」「障害のある子どもについて理解し、かかわることができる場」という意味内容の回答が得られた。

このように、回答の割合としてはやや少ないものの、親は、きょうだいがムーブメント活動に参加する過程で、同胞と楽しく遊べた体験を通して、同胞の気持ちや能力について新しい考えをもったり、他の障害のある子どもとその家族と一緒に活動することで、多様な障害について知ったり、かかわり方を獲得したりできたことを報告している。これらの成果は、「障害の有無を意識せず」「障害のある子どもも、ない子どもも、関係なく」という親の表現にあるように、きょうだいが障害のある子どもの世話を目的にかかわるのではなく、一緒に自らも思い切り遊ぶ体験の中から、獲得したものであることが示された。

このような体験をもたらした要因として、上記(2)の項で

も述べたムーブメント活動が持つアプローチの柔軟性に加え、「競争排除」や「個々の子どもの成功感重視」の原則（小林, 2006）に基づくプログラム展開があると思われる。ムーブメント活動では、参加者は、優劣を比較されることなく、すべてのパフォーマンスを肯定的に評価され、そのオリジナリティや努力への賛辞が送られる。このような活動展開が、きょうだいたちにとって、能力や行動に困難さを持つ子どもを排除したり、一方的に守ったりする関係ではなく、遊びを共有する仲間としての関係を実現することにつながったのではないかと考えられた。

2. 家族参加型ムーブメント活動における、きょうだい参加の課題

(1) 親ときょうだいの目的意識における齟齬

本研究で評価対象とした家族参加型ムーブメント活動は、地域における障害のある子どもの療育活動の一環として設定されたプロジェクトの中で、行われたものである。よって、家族が参加を希望した主目的は、障害のある子どもの発達促進に役立てることにあると考えられる。親の意識からすれば、本来、同胞のための活動であって、きょうだいのためのものではない。しかし、これまで見てきたように、きょうだいたちもまた、参加者の一員として、思い切り遊び、達成感や満足感を得る中で、活動の中心的存在として、肯定的、積極的な自己像を得るとともに、その発達が促進され、併せて、同胞観、障害者観をも変容させていく可能性があることが示された。よって、きょうだいにとっては、自分自身のための活動であるといえる。

この認識の齟齬があるために、親の中では、活動中にきょうだいが同胞よりも自分を優先したり、同胞を積極的に手助けしなかったりするのを不適切だと捉え、親の望む、障害のある子どものきょうだい像にかなう振る舞いを強く期待するケースが見られることもあった。また、親への調査でも、設問②の回答カテゴリー【きょうだいのできないことや親の期待と異なる姿が見られた】の具体例として、兄であるきょうだいが「年下の子どもと遊べない」ことを指摘したり、【親を求めてかかわりたがる姿が見られた】の具体例として、弟や妹が「家族と手をつなぎたがる」「抱っこをせがむ」「すねる」というように、同胞とかかわろうとする親を邪魔するような行動で親を求めることへの戸惑いを記述したりする例が見られた。

また、筆者の観察エピソードでは、必ず同胞のあとからでなければ遊具を使おうとしないきょうだいや、親のそばについて同胞を手伝うことがあっても、自分だけではやろうとしないきょうだいの様子が見られたことがあり、きょうだい自身の中にも、自分が参加しているのは同胞の手助けのためであると意識して振る舞い、それをよしとする親の意識と連動して、自らの活動を制限してしまうケースもあることが推測された。

このように、もし親や、さらには支援者までもが、これまで確認できた家族参加型のムーブメント活動がもたらす

きょうだいの育ちへの効果は、同胞のための活動の副産物としてきょうだいにもたらされたものであるという意識にとらわれているなら、結局きょうだいは部外者のままである。よって、ムーブメント活動に家族が参加することの意義を再度整理し、活動の目的に位置づけ、親の意識を変えていく働きかけが必要である。すなわち、家族と一緒にムーブメント活動に取り組むことにより、誰かのためではなく、障害のある子ども、きょうだい、そして親自身など、参加する家族全員が、それぞれ何をしようとしているのかを意識できる手立てが必要であると考えられる。

(2) 親による過度の達成要求

多様な実態の子どもが参加するムーブメント活動では、全員が同じ環境を使って活動に取り組むが、個々の子どもの活動のねらいと方法は、その能力に応じて、一緒に活動する親や支援者が判断する方法を取っている。プログラムリーダーは、集団の大多数がどのように動くかを観察し、適宜、遊具環境を変え、展開のスピードを調整しているが、全員がプログラムリーダーの指示に応じて同じペースで活動し続けることは想定していない。よって、親が子どもの状態を把握して、その場で臨機応変に子どもの課題を見極め、活動内容を調整する必要が生じることがあるが、これは親にとって難しい場合もある。親によっては、きょうだいと同胞で設定する達成基準の違いが大きく、同胞に関してはスモールステップで適切に活動内容を組み立てたり調整したりするのに、きょうだいには始めから「できる」ことを前提に、過度な達成を求めるケースも見られた。例えば、親用アンケートの設問②の項で述べたように、3歳の妹が疲れて我慢できなかったことや、2歳の妹が順番が分からなかったことを「できない」と指摘したり、同胞の行動を模倣する1歳の弟の行動に失望したりなど、発達の当然であると考えられるきょうだいの行動を否定的に評価するものである。よって、このような過度の期待がきょうだいの負担になったり、親の子育てに不全感につながったりしないために、活動展開においては、個別の配慮を行う必要があると考えられる。

(3) プログラムリーダーのスキルアップ

これまで見てきたように、家族参加型ムーブメント活動に参加するきょうだいたちが、活動を十分楽しみ、達成感や満足感を得るためには、プログラムを作成・運営するリーダーに、きょうだいの参加を想定した柔軟な対応が求められることになる。リーダーは障害のある子どもの発達特性を踏まえつつ、そこに集うきょうだいの育ちにおける課題、親の子育てに関する意識など、家族が抱える多様な支援ニーズを敏感に捉えてプログラム内容をアレンジし、サポートスタッフと協働しつつ、活動を展開していくためのスキルを獲得していく必要がある。そのためには、実践的な研修が必要であり、本研究で取り上げた家族が誰でも参加できる「ムーブメント教室」のような地域における支援活動の場が継続的に設けられている必要がある。

VI. 本研究のまとめと限界

本研究における調査の結果、家族参加型ムーブメント活動は、参加したきょうだいにとって、自らもまた、活動の中心的存在として思う存分活動でき、楽しい体験ができる場であり、きょうだいも積極的に活動し、達成感や満足感を得て、「できる自分」を感じ、さらに積極的に活動しようとする好循環が生み出されることで、きょうだいの成長発達を促す場となりうることを示された。また、きょうだいたちは、ムーブメント活動を通して、同胞と同じ遊びを楽しむことができる体験や親と一緒に遊べる体験、同じ立場にある他のきょうだいとの交流体験など、日常生活場面ではなかなかできないかわりを体験することができること、また、特に親の視点から、他の障害のある子どもを育てている家族と一緒に活動することで、きょうだいが同胞のみならず、多様な障害のある人を受け入れ、分け隔てなく活動できるようになることが示された。一方、きょうだいに見られたこれらの成果は、きょうだいにとっては、自分自身が獲得したものであるにもかかわらず、親によっては、同胞のための活動で得られた副次的な効果と捉えられ、活動参加に関して、きょうだいの意識との齟齬が見られるケースや、きょうだいに年齢不相応な期待を寄せ、それができないことに対し、否定的な評価をするケースも見られた。このことから、家族参加型ムーブメント活動がきょうだいの育ちに十分貢献できるためには、親も含め、参加家族成員それぞれが、誰かのためではなく、自らと家族一人一人に関する個別の目的意識を持って参加できるように支援する必要があると考えられた。また、家族参加型ムーブメント活動がそのような多機能性を担保できるようになるためには、プログラムリーダーの育成と継続的な活動の場の設定が不可欠であると考えられた。

本研究の限界として、以下の2つが挙げられる。1つ目は、収集した各回のデータ数にばらつきが大きく、各回のプログラムの内容や特質によるきょうだいへの影響の比較分析ができなかったことである。今回は、プログラム内容に関して、主として自由記述から抽出して分析したが、延べデータに基づいて全体の中で比較検討する方法をとらざるを得ず、各回の活動の特性がきょうだいの行動にどのような効果を及ぼし、プログラム内容によってどのような質的な差があったかの詳細な検討をするには至らなかった。2つ目は、きょうだいが継続参加することによって、きょうだいに起こる変容過程を捉えることができなかったことである。評価対象が自由参加を原則とする、地域における任意の活動であったため、個々のきょうだいの参加度にばらつきがあり、継続的に参加したきょうだいを追跡するデータを収集することができなかった。家族参加型のムーブメント活動にきょうだいが継続的に参加するならば、その効果は促進されると予測される。よって、事例を取り上げ継続的な分析を行うことで、活動の効果と課題をより明らかにでき、今後のきょうだいのための家族参加型ムーブ

メント活動のあり方を模索する一助となると考える。

引用文献

- 阿部美穂子 (2009) 親子ムーブメント活動が障害のある子どもの親に及ぼす効果. 富山大学人間発達科学部紀要, 4(1), 47-59.
- 藤井由布子・小林芳文 (2006) ムーブメント教育理念を用いたダウン症児の家族支援－AEPSファミリー・レポートを参考にして－. 児童研究, 85, 68-82.
- 浜本真規子・永田雅子 (2011) 親子教室に参加する親の援助要請を支える要因. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学 58, 113-118.
- 飯村敦子 (1998) 地域における障害を持つ子どもへの発達援助－ムーブメント教育による療育教室の実践－. 児童研究, 77, 2-10.
- 笠井聡子 (2013) 重症心身障害児・者のきょうだい体験－ライフストーリーの語りから－. 保健師ジャーナル, 69 (6), 454-461.
- 小林芳文 (2005) MEPA-R (Movement Education and Therapy Program Assessment-Revised: ムーブメント教育プログラムアセスメント), 日本文化科学社.
- 小林芳文 (2006) ムーブメント教育・療法による発達支援ステップガイド－MEPA-R実践プログラム. 日本文化科学社.
- Meyer, D. J. & Vadasy, P. F. (2008) *Sibshops: Workshops for Siblings of Children with Special Needs Revised Edition*. Paul H. Brookes, Baltimore, Maryland.
- 大崎恵子・新井良保 (2008) 家庭支援に生かしたムーブメント法の活用事例－17年間に渡るMEPA-IIの記録を通して－. 児童研究, 87, 21～29.
- 諏方智広・渡部匡隆 (2005) 自閉症児のきょうだい支援に関する実践的検討. 日本特殊教育学会第43回大会発表論文集, 714.
- 吉川かおり (2008) 発達障害のある子どものきょうだいたち. 生活書院.

謝辞

本研究を進めるにあたりA県「親子で楽しむムーブメント教室」の参加者ご家族の皆さんに、多大なご協力を頂きました。また、同教室の運営スタッフの先生方には、活動プログラムの作成と実践、アンケート調査の実施と集計の全過程において、多大のご尽力を賜りました。特に、本研究の成果は、スタッフの先生方の質の高いプログラム作成力と実践力なしには、得られなかったものです。ここに、心より感謝申し上げます。